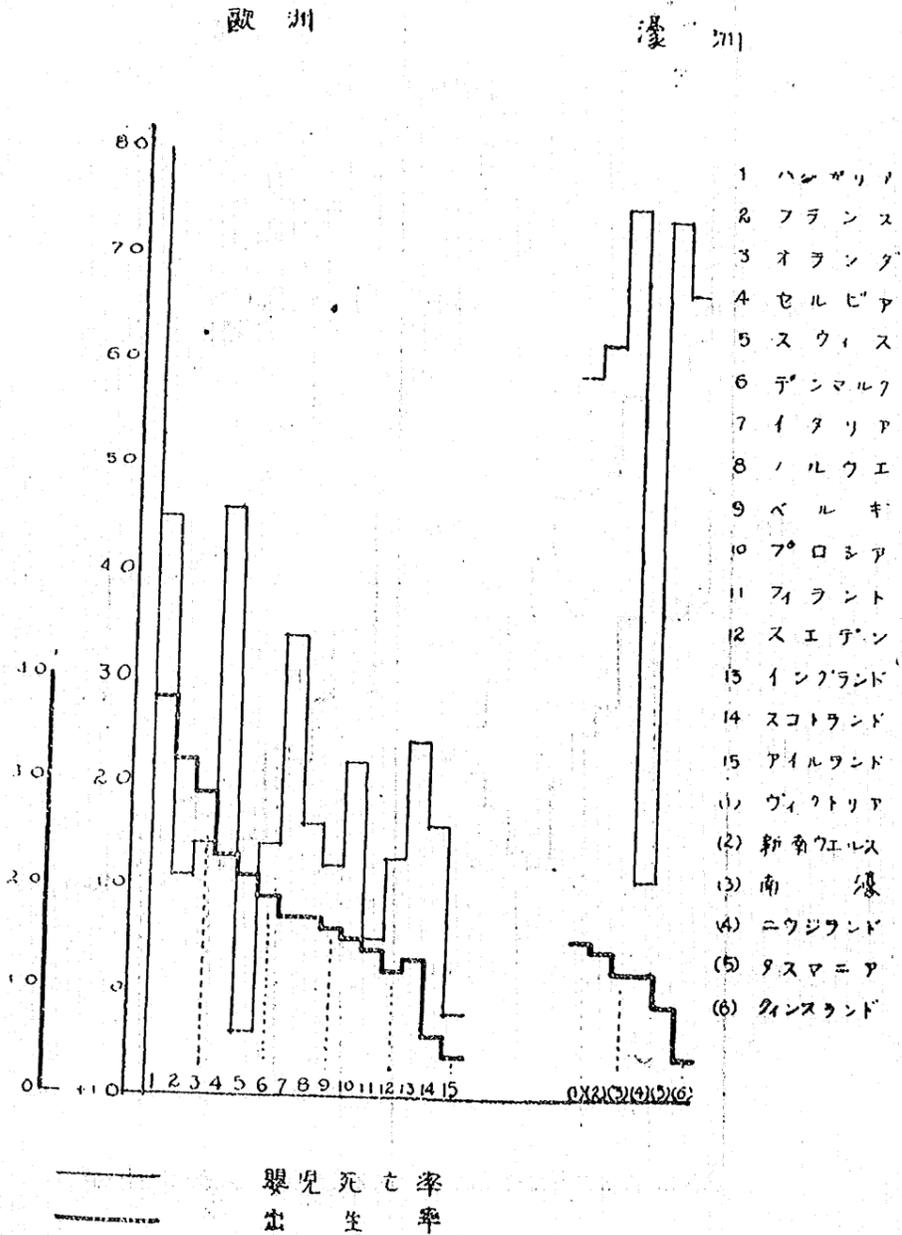


Title	シニョアの価値論
Sub Title	
Author	浜田, 恒一
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1926
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.20, No.5 (1926. 5) ,p.655(121)- 684(150)
JaLC DOI	10.14991/001.19260501-0121
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19260501-0121">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19260501-0121</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

第五圖—1891—95ヨリ1901—05  
マテニ起レル出生率及嬰兒死亡率減分高  
(嬰兒死亡ハ出生千人ニ對ス)



シニョアの價值論

濱田 恒一

(一)

アダム・スミスが使用價值に關する論議はそれが交換價值と著るしく背馳するの事實に言及するに止つて(註一) 所論の殆んど全部は交換價值並びに價格を取扱つてゐる。

スミス價值論の主たる問題は労働である。その一つはスミスが労働を以て價值の尺度となせるか、將た原因となせるか、將又兩者なりとなせるかであり、その二は茲に謂ふ労働が、貨物の生産に要したる労働なりや、將た貨物が支配する労働なりやである。而して之に關聯して資本の蓄積と土地の私有制の發生以前と以後とに就いて、異なる價值原則を認めたりや否やの問題が存する。

スミスが労働を以て價值の尺度なりと認めたるは、國富論並びにレクチュアアの各處に存する明瞭なる辭句よりして疑ひを容れぬ(註二)が、更に進んで價值の原因なりと認めたるや否やはしかく簡單には決定されない。

先づ労働を以て價值の一因なりとせるは否定し難いが(註三) 唯一の原因なりとせるかは疑問なりと云はざるを得ない(註四)。

唯一ならずとすれば他の原因は何であるか。

此處には稀少性も效用も説かれて居らぬ。我等が考慮の裡に入るものは利潤並びに地代である。一派の論者は「利潤及び地代を以つて土地に投せられたる労働の生産物よりの第一及び第二の控除なり」とせるスミスの言葉に依つて、又「労働の全生産物は最早労働者に屬さない。彼はそれを資本家と共に分けねばならぬ」等の言葉によつて、利潤及地代を以て價值より引き裂かれたるものと做し、以てスミスを労働價值論者たらしめむとする。若し然りとせば利潤及地代は論理上價值決定の後に生ずべきものにして、その決定に與るを得ざる(三田學會雜誌第十六卷第三號小泉教授)の道理なるを以て、斯説を採用するを得ぬ。然らば利潤及び地代を價值の原因中に包含せしむる時は如何。私はスミスを以て一種の生産費説を採用するものとなす三邊教授に従ふものである(三田學會雜誌第十五卷第二號及び第十七卷第七號所載論文参照)森耕二郎氏は三邊教授を批評して「かゝる社會に於ける價值論が労働價值論と何等係りがないといふのは、餘りに彼れの價值論を皮相的に解したるものではあるまいか」と述べられてゐる(經濟論叢第二十卷第六號)。三邊教授の説を「労働價值論と何等係りなきもの」と主張するものと解するは、三邊教授が「労働生産費説」といふ名稱を附與して居られるにみても稍早急の觀があるが、併し乍ら森氏其他のスミスを以て労働價值論者なりと主張する人々が擧ぐる數多の反證中には、種々なる陳辯を試むるに非ずんば反擊するに著しく困難なるものが存する。同一事は反労働價值論者の擧示する處に就ても云ひ得らるゝ。

スミスの價值論を一層複雑ならしむるは「支配又は購買する労働」なる觀念の誘入である。スミスは白く「一貨物を所有するも、自ら之を使用又は消費する事なく、他貨物と交換せんとする者に對する當該貨物の價值は、それが彼をして購買又は支配せしむる労働量に等しい」と(Canan's ed. Vol. I. p. 32)。

資本の蓄積及び土地の私有制の發生前に於ける社會に於ては、生産に要する労働量と支配する労働量とは幸にして一致するも、それ以後の社會に於ては地代と利潤の侵入によりてこの一致は妨げられ、貨物の價值は即ちその支配する労働量は地代と利潤に該當するだけの開きを生ずる。即ち、それだけ「使用せられたる労働量以上に高められなければならぬ。斯くてスミスの價值論なるものは、一種の労働生産費説なりとの解釋に到達するものといひ得らるゝ譯である。

如上の價值論と次いで述べべき價格論とは如何なる關係に在るや。スミスの價格論に従へば、貨物には需給關係の變動に依つて變動する市場價格なるものがあるが、その市場價格の變動は一つの中心に依つて常に平衡に復せしめらるゝの傾向を有する。その中心は自然價格即ち眞實價格である。自然價格とは、當該貨物を生産し市場に齎すに使用されたる労働の勞銀及び資本の利潤と地代に支拂ふに足る所のものであつて、その勞銀利潤地代は就れも自然率に於けるそれである。市場價格をしてこの自然價格に近づかしむる力は、自由競争の下に於ける供給と有効需要の割合である。前者後者に比して大なれば市場價格は自然價格以下に下り、以て供給減少しその結果價格は騰貴する。反對の場合には反對の結果を生ずる。市場に齎らされたる量が正にその有効需要に足る時、市場價格は自然に自然價格に到達する。この自然價格は、スミスは明言して居らないが、私等の如くその價值論を以て一種の生産費説なりとする解釋を比較的有力なりと信

する者にとつては、その交換價值に符合するものの如く思はれる。これを除いては價值論と價格論の有力なる連鎖を私は見出し得ない。

(註一) 「最大なる使用價值を有するものにして、殆んど又は全く交換價值を有しない事が屢々ある。水よりも有用なものはないが、それは殆んど何物をも購買し得ぬ。反對に金剛石は殆んど使用價值を有せぬ。併しそれと交換に頗る多量の他の貨物が屢々得られる」(Wealth of Nations Canham's ed. Vol. I. p. 30)。

(註二) 國富論第一編第五章六章七章參照「譯義」第二編第二部第七、八節參照。

(註三) 例へば「國富論」ヤヤナン版第一卷三十二—三三頁參照。

(註四) 例へば、上掲「國富論」五十六頁參照。

(II)

ミスが曖昧の裡に遺したる労働價值論を、一應徹底せしめたるはリカアドオである。

彼も亦ミススの如く日々變動する市場價格と、結局之を統整する自然價格の二種を認める。市場價格は時々の需給關係に依りて變動著るしきも、決して無拘束に然るものに非ず。自由競争の行はるゝ限り、結局は自然價格に引き付けらるゝの傾向を有し、久しくこれより遠ざかるを得ないものであると説く。而してこゝに云ふ自然價格は明白に交換價值に當る(原論第一版八十九頁)。

リカアドオはミスと共に使用及交換の二價值を區別し、前者を以て後者にこりて不可缺なるものなれども、以て交換價值の尺度たり得ないものとす。

然らば交換價值を決定するものは何であるか。その生産に費されたる労働量である。こゝに費されたる労働といふは直接労働のみならず、機械其他の生産に費されたる間接的労働をも包含するは勿論である。加ふるに、リカアドオは、費されたる労働量を以て單に貨物交換決定の原因と認むるのみならず、亦既存の價值の尺度たらしめんとするものである(上掲書十一頁)。

併し乍ら、リカアドオは單純なる労働價值論を最後まで徹底せしめなかつた。同額の資本中、固定資本と流動資本の占むる割合が異なる時は、勞銀の變動に依つて價值の蒙る效果の異なるを認むるのみならず、更らに、假令固定資本と流動資本の占むる割合が同一なりとするも、その固定資本の耐久性異なるに従つて、同一の結果が生ずる。これリカアドオにとりて、固定資本と流動資本の差は一にその耐久性の度合に懸るを以て、耐久性減少するにつれ固定資本は流動資本に近づくを以てである。かくの如くにして最初の労働價值論は修正を蒙つたが、それが貨物の交換價值決定の實際に當つて生ずる效果は、前者に比ぶれば著るしく劣れるものなりとの見解は保持された(小泉教授「リカアドオの價值論」に依る)。

(III)

リカアドオの遵奉者たるジエームス・ミルは、労働價值論を固守する事前者以上である。

ミルに従へば、經濟學が國家に對するは家政學が家族に對する如きものである。後者が家族の消費と供給の二大目的を有すると同じく經濟學も社會の消費と消費の基礎たる供給の二大目的を有する。併し乍ら労働の介在なくして供給せらるゝ貨物は、家政學に於て何等注意するの要なき如く、經濟學に於ても顧みるの要はない。かくて經濟學は生産論及び消費論に分るゝが、消費されんが爲

めには分配されなければならぬ。従つて分配の法則が兩者の間に介在する。又貨物が生産され分配せらるゝ時その一部が相互に交換せらるゝ事は、再生産及び消費の爲めに頗る便利である。故に交換を律する法則の探究は消費論に先つものである(經濟學要論一八二一年二頁―四頁)。

ジエムス・ミルが問題とするは交換價值である。一貨物の一定量が他貨物の一定量と交換せらるゝに當つては、兩貨物の所有者達をしてかゝる交換を決心せしむる或物がある。

それは需要供給の原理である。一貨物の市場に齎らされたる量が比較的大なれば、その量少なき他貨物との交換に於ては、比較的多量が與へられねばならぬ。こゝに於てか第二の貨物の市場に齎らさるゝ量が増加する。かくて之と交換に與へらるゝ第一の貨物の量は比較的に減少するといふ。

併し乍らミルに従へば、此の如きは問題の全部を解決するものではない。若し貨物交換の量が供給と需要の割合によるならば、その割合そのものは何に據るのであるかの問題に答へねばならぬ。

ミルは答へて貨物を市場に齎らす費用(The Costs of bringing commodities to market)なりと云ふ。若し兩者の費用等しければその割合を變更せんとするの動機生ずるの理なし。何となれば、彼等の勞働を相手の貨物の生産に投ずる事に依つて何等得る處がないからである。等しからざる時は直ちにその割合を變更せんとする動機が発生する。比較的に生産費少なる側は交換に依つて利し、大なる側は失ふ。こゝに於て交換に於いて前者の量を増し、後者のそれを減少せんとする。かくて遂に双方の生産費は等しくなる。故に貨物の相對的價值は先づ需要と供給の關係に依るも、結局は生産費に依る事になる。偶然的にはかゝる生産費用(Productive cost)の點を上下するも、競争の法

則は之をその點に到らしめ且つ之を保持する(上掲書六六―六九頁)。

然らば彼の云ふ生産費とは何であるか。

曰く「生産費は勞働と資本の結合よりなる」(六九頁)。然るに元來資本なるものは貨物よりなるが故に、最初の資本は必然純粹勞働の成果でなければならぬ。何となれば、最物の貨物がこれに先在する貨物に依つて生産せらるゝの理がないからである。而して又勞働が唯一の生産要素なる時は、その生産さるゝ貨物の交換價值は、その生産に要したる勞働量に依つて決定せらるゝ。かくて最初の資本の價值は勞働に依つて測定せらるゝ。然るに資本自體の價值が勞働に依つて決定せらるゝ以上、かゝる資本と勞働とによつて生産せらるゝ貨物の價值は、勞働量に依つて決定せらるゝといふ結論に到着する。唯等量の勞働を秤量するに際しては、難易及び熟練の種々なる度合を斟酌すべきは勿論なりといふ(七二―七四頁)。

斯くの如くにしてミルは簡單なる勞働價值論を主張したが、彼も亦リカアドオが當面せる困難に逢着した。一資本中に於ける固定資本と流動資本の比の種々異なる事これである。リカアドオは遂に之によつて勞働價值論に修正を加へたが、ミルは一種の相殺説を樹て、飽くまで當初の價值論を徹底せんと試みたのである。

既述の如く、ミルは資本を以て勞働の成果なりと看做して之を貯へられたる勞働(hoarded labour)と稱し、之に對して直ちに手を以て適用さるゝを即時の勞働(immediate labour)と稱する。従つて貨物が資本と勞働によりて生産せらるゝといふは、結局二種の勞働によつて生産せらるゝといふに等し

い。然るに此の二種の勞働には二つの相違がある。第一は兩者が常に同一の率を以て支拂はれざる事換言せば一方の騰貴下落が他方の騰貴下落に伴はざる事であり、第二は兩者が一切の貨物の生産に對し常に同一の比を以て貢獻せざる事これである。

少しく説明を加ふるならば、「貯へられたる勞働」に對する支拂とは利潤の謂であり「即時の勞働」に對する支拂とは勞銀を指稱する。然るに勞銀と利潤とは「一物が兩個の當事者に分配せらるゝ」關係にあるを以て一方より控除せらるゝ處は、他方の受領する處となる。従つて利潤上れば勞銀下落し、利潤下れば勞銀騰貴する(五六一―五七頁)。

困難は第二に存する。種々なる貨物の生産に結合する兩種勞働の度合が各、異なるは、ミルの認むる處である。本來の勞働價值論を改むるなくしてミルは之をも説明せんとする。

先づミルは三個の模型的貨物を假想する。第一の貨物は純粹勞働によつてのみ生産せられ何等資本の援助を受けざるものである。第二は勞働と資本が相半せるものであり、第三は資本のみを以て生産せらるゝものである。今勞銀上り利潤下れば、生産に要する勞働量が資本に比して大なる貨物は少なる貨物よりも騰貴が大なる譯である。此際第一種の貨物を標準とせば、其種に屬する貨物の價格には變動なく他種の貨物は下落する。第二種の貨物を標準とせば其種に屬する貨物には變動なく、それより第一種に近づくに従つて騰貴大に、第三種に近づくに従つて下落大となり、貨物の總體に就いてみる時は騰落なき事となる。然るに一切の貨物は貨幣と比較せらるゝ。貨幣の價值はその生産費即ち費されたる勞働と資本による(二〇一頁)。故に若し貨幣にして第二種の貨物に屬するものなる時は、貨物總體としては何等の騰貴も下落も存しない譯である。事實貨幣は之に近きものである。従つて全體として、貨物の價格は勞銀の騰貴に依つて影響を受けない事になるといふのである(八十頁―八十二頁)。

## (四)

リカードを著しく簡約して、大體に於てリカードを信奉せるジェームス・ミルを詳論し、その價值論が前者以上に一本調子なるをみた。次いで來る者はトーマス・ロバート・マルサスである。

マルサスは大體アダム・スミスに従つて價值を三種に分つ。第一は使用に於ける價值(Value in use)にして對象の内在的效用を意味し、第二は交換に於ける名目價值(Nominal Value in exchange)にして貨物の貴金屬に於ける價值である。第三は交換に於ける眞實價值(real value in exchange)であつて、これは一對象が交換に於て勞働をも包含する生活の必需品と便宜品を支配する力を意味する(マルサス「原論」二八二〇年版六二頁)。

茲に問題とする交換價值はこの第三のものである。

一切の交換價值は「この名辭の示す如く、一物と他物を交換せんとする意思及び力に基く。凡ゆる交換はより多く欲する一貨物と交換に、何等かの他貨物を與へんとする意思及び力のみならず、その欲する貨物を所有する側に於ても、それに對して提供せんとする貨物に對し相應する需要が存せねばならぬ。かゝる相互的需要の存する時にのみ交換は成立の可能性を有する。既にかゝる需要の存する時、交換の成立する率即ち一定量の他貨物に對して一貨物が與へらるゝ割合は、所有せん

とする願望及びその所有を獲得する難易に基いて當事者が貨物に對して抱く尊重の相對關係に左右される。かくして結ばれる契約は、個々の人の願望と力の必然的相違に依つて最初は頗る區々たるものであるが、一定の時を経て平均が作られる。斯くて一切の貨物に就て通用價值 (current value) が樹立される(「原論」五二—四頁)。

既述の如く交換價值は交換の意思と力に基く。この意思と力とは需要と供給となる。需要とは購買能力を伴へる購買意思であり、供給とは販賣意思を伴へる生産である。斯くて貨物の相對的價值は、供給と對比せられたる需要によつて定まる。決して需要若しくは供給の一方に依る事なく常に相互の關係に基く。

この關係は如何にして決定せらるゝか。それは需要及び供給の實際の大きさ(actual extent)ではない。需要に就いては如上の定義に云ふ意思と力の増減であり、供給に就いては一定量の貨物獲得の困難の増減である。前者が後者に比して増す時、反對に云へば後者が前者に對して減する時、價值は騰貴し前者が後者に比して減する時反對に云へば後者が前者に對して増す時、價值は下落する。

需要供給なる名辭を此の如く解し使用するならば、如何なる價格も必ずこれに依つて決定せらるゝをみるのである(「原論」六二—七一頁)。

需要及供給を此の如く解するにせよ、價格が單にその相對的關係によるのみでは私等は不安定な心持を免れぬ。假令結局はかかる相對的關係によるものなるにせよ、何等かその關係が概して落ち付く點はないか。マルサスは之を生産費に求め、但しこの場合には生産費なるものが、アダム・スミスの認めたる要素を總て包含するものと解せねばならぬといふ。即ち利潤地代勞銀の三者を包含する限りに於てのみ然るといふ。又後述する如くマルサスは「使用されたる勞働」を以て價値の尺度なりとするに反對する。併し乍らこれは生産費及び勞働が價格に最も重要な影響を與ふる事を拒むものに非ずして、唯これ等を考ふるに當つては、これを以て供給の必要條件なりと考ふべきなりといふのである(「原論」七八頁)。

實際の貨物交換に當つて、之に影響する事情は需給の關係に限るとは云へ、人間の願望の對象は殆んど總て人間の努力の媒介に依るものなるを以て、如上の對象の供給は、かかる努力の量と方向過去の勞働の成果より受くる助力及び原料と勞働者の食物の多寡に支配される。生産が繼續される爲めにはこの三者が繼續的に供給され得る程の價格が必要である。マルサスは之を必要價格と稱し、こはアダム・スミスが自然價格と云へるものに精密に一致するといふ(「原論」七八—八三頁)。マルサスは反復して曰く「假令生産費のみが貨物の價格を決定する様にみえても、生産費を支拂ふ事が貨物の供給の必要條件であり、且つこの費用の成分がそれぞれ全體を決定する同一の諸原因によつて決定せらるゝが故に、我等は生産費に關係せしむる事に依つて需要供給の原理を排除し得ない。自然價格も市場價格も等しく這般の原理に支配せらるゝ。異なる處は前者が需要と供給の通常平均の關係に依るに對し、後者が特異的偶發的關係によるの一事に過ぎぬ(「原論」八五頁)。

マルサスが價值論の消極的一特徴は、リカードオ流の勞働價值論に對する反對である。然らば如

何なる理由を以て、費されたる労働を以て價值の尺度たらしむるを拒否するのであるか。

先づこの尺度は絶對的意義には適用されぬ。甲乙二貨物に同一の割合を以て労働が増加されたりとせよ。此の場合、兩者の交換の割合は全く同一にして、従つて投下せられたる労働は夫々増加してゐるに拘らず價值には變動がない(上掲書八六頁)。

又之を相對的に探つて、貨物の交換價值は投下せられたる労働の比較量に依ると云ふも、尙か、事が通用する社會はない。土地共有にして資本の殆んど用ひられぬ初期の社會にあつては、交換せらるゝものは種々なる原産物であるから、之に加ふる労働の成果は常に不確定である。故に初期の社會に於て、獲得に要する労働量の割合が交換を律する唯一の事情なりきとする、スミス及びリカードオに讃同しない。而も事實に於て、生産費が全く労働に限らるゝといふ社會はまづない。極く初期の社會に於ても利潤は交換價值の問題に参加する。就中收穫の遲速の異同は、投せられたる労働量には何等關らざるに、それが價格決定に於て最も重要なものは往古も最近も全く變らぬ。之に加ふるに、リカードオ氏が認めたる例外、即ち一資本中に於ける固定資本と流動資本の割合の異なるよりして生ずる例外を加ふる時は、労働價值の原理はリカードオ氏が言ふ如く遍く適用され得るものではない(九〇頁)。

リカードオは、労働の價格の騰貴は多數貨物の價格を低落せしむるといふ。この命題はその外觀のパラドクスのなるに拘らず、眞實なりとしてマルサスに認容せられたが、同時に労働の騰貴が利潤の下落以上に出づる爲めに、前者の騰貴に依つて價格の騰貴するものも亦多數存する事が主張せられた(九三頁)。

加之、一切の土地が私有せらるゝ處にあつては、地代の支拂は内國製品及び内國農産物の大部分の供給の一條件たるものである。固よりマルサスも亦「地代を決定するものが價格であつて、價格が地代を決定するのではない」(人口論第三版第二卷二六六頁—Bonar. Malthus and his work 1885, p. 222) 事を主張し、これを以て耕作に要する労働の労働資本の利潤其他一切の失費を支拂ひたる後に地主の手に残る價值なりとするものであるが(「原論」二三四頁)、地代なるものは實際上價格より支拂はるゝものなるが故に、地代の支拂は、換言せば地代を支拂ふべき如き價格の支拂はるゝ事は大多數の貨物の供給の必要條件である。その價格が労働を利潤にのみ分析せらるゝ貨物は、極く少許である。大多數は労働、利潤、及地代の三者に分析せらるゝ。植物性食料品の價格が、最良なる事情の下で生産さるゝに使用されたる資本及び労働の量に依つて決定せらるゝを認めても、「若し尙、等價の生産物が肥沃なる土地に於ては、より少なき労働と資本を以て生産せらるゝ事を認むるならば、體現されたる労働量が交換價值を決定するといふ命題は支持し難い」(「原論」九七頁)。

かくの如くにして固定資本部分の異同、流動資本の収益の遲速、外國品の量、租税の影響、文明國に於ける地代の普及等より生ずる變動を觀るならば、到底労働が價值を決定するとは云ひ得ないのである(一〇五頁)。

既に「費されたる労働」が價值の尺度たり得ないとするならば、之に代るべきものは何であるか。貨幣穀物及び「貨物が支配する労働」が提議される。マルサスはその總てを斥けて、穀物と「支配す

る勞働」の平均を以て最良の尺度なりと主張した。それは如何なる貨物を探つても、單獨にて價値の尺度たり得るものなきに失望して、寧ろ反對の方向に動く兩貨物の平均を以て之に代へんとする試みである。

穀物が勞働に比して高價なる時は、勞働は穀物に比して低廉な筈である。一定量の穀物が支配する生活の必需品、便宜品及び娯樂品の量が最大なる時は、一定量の勞働が支配する如上の貨物の量は最少である。反對の時は反對の結果を生ずる。故に兩者の平均を探れば、反對の方向に動く兩者の變動によつて矯正せられ爲めに、異なる時期と、種々變化する事情の下にあつて、比較的等量の必需品、便宜品及び娯樂品を表はすべき一尺度を得らるゝであらう。固よりかゝる尺度にも缺點は存する。その主たるものは、資本、機械及び分勞が種々なる國と時期に於て、勞働の成果と工業製品の價格を變動せしむる事から發するが、這個の諸結果は交換價值よりも寧ろ富に關する。富と交換價值の關係は密接ではあるが、兩者は常に同一ではない。故に價値の秤量に際しては、熟練及び機械より生ずる廉價は之を無視しても大過ない。唯、穀物そのものが秤量の目的物たる時には、それが國內及び國外の勞働に對する支配が最上の尺度であるといふ。マルサスと雖もこの尺度の完全ならざるは知る。然も勞働の尺度は「必然的根本的に誤れる」が故に、誤れるものよりは寧ろ「不完全なる」ものを選びむとするに過ぎないのであつた(「原論」二二六—二二三頁)。

然るに後に至つてマルサスはこの新しき尺度を撤回し、「支配する勞働」を以て之に代へた。元來マルサスは價値を以て或貨物が尊重せらるゝ程度なりとするものであるが、姑らくこれを以て「一般的購買力なりとするも、尙「支配する勞働」は最良の尺度である。一般的購買力とは多數の貨物 (mass of commodities) を購買する力であるが、かゝる多數の貨物は全く取扱ひ得ざる處であるから、從つて之を購買する力なるものは決して確定し得らるゝものでない。故に實際上の目的の爲めに何等かの對象をとつて、以て貨物總體 (general mass) の平均を代表せしめんとするのである (Definitions in Pol. Eco. p. 205)。斯くて支配する勞働が選ばれたのである。而して茲にいふ「支配する勞働」とは、一貨物が「通常支配する勞働」であつて、「實際に支配する勞働」ではない(同著二〇六頁)。マルサスは價値決定に關する諸説を順次列擧して、夫々の説による價値に「支配する勞働」を適用したる後に曰く、「我々が貨物の價値を以て、それが受くる尊重によつて表はさるゝものと考ふるにせよ、又需要に對比せられたる供給に全然基くと考ふるにせよ、又それを獲得せんが爲めに人々が爲さんとする犠牲によつて定めらるゝと看るにせよ、又その供給の自然的必然的條件により、或は又その原始的生産費 (elementary costs of production) によるものとせよ、將又生産者數に、若しくは貨物に作用する一切の價値原因の結果によつて決定せらるゝと考ふるにせよ、何れにしても、貨物が通常支配する勞働は、その自然的通常價値を測定し、それが實際に支配する勞働はその市場價値を測定する」と(「定義」二二二頁)。固よりマルサスは這個の尺度をも完全なりと主張するものに非ずして、唯最上なりと主張するものである(「定義」二〇五頁)。斯くてマルサスに到つても、完全なる價値の尺度は見出されなかつたのである。

## (五)

Nassan William Senior(1790-1864)の經濟學上の貢獻は、雜誌への寄稿は別として、1) Introductory Lecture before the University of Oxford. 1827. 2) Three Lectures on the transmission of the precious metals. 1828. 3) two Lectures on population. 1829. 4) Three Lectures on the Rate of Wage. 1830. 5) Three Lectures on the cost of obtaining money. 1830. 其他二十數種に及んで居るが、最も重要なものは Encyclopaedia Metropolitana の一部として出版せられたる An outline of the science of Political Economy. 1836 である。これは後に一八五〇年に到つて、Political Economy として別個に出版された (Dictionary of National Biography によつて)。以下述ぶる處は此書を主とするものである。

シニョアの定義に依れば、經濟學とは富の性質、生産及び分配を論ずる一科學である。従つて斯學の中軸たるものは富である。富とは何ぞや、價值を有するものを言ふ。シニョアは使用價值なる言葉を用ゐない。彼がいふ價值とは交換價值である。故に經濟學は交換價值を有するものを取り扱ひ、又これのみを論ずる。交換價值を有する限り必ずしも物的對象に限らない。健康、力量、智識其他身心の自然又は獲得せる一切の力をも包容する。而して物を富たらしむる、換言すれば物に價值を有せしむるには、三個の屬性を必要とする。效用・可讓性及び供給制限の三者これである。

價值なる語は永く激烈なる論争の主題となり來つてゐるが、シニョアはこの語を「物をして交換に於て授受するに適せしむる屬性、換言すれば貸貸販賣又は貸借購買せらるる屬性」の意味に用ゐる。かゝる意味に於ける價值は、二對象間に相互的に存在する一關係であつて、之を精確に表はすものは、一定量の他物と交換して獲得し得べき一物の數量である。吾等が金剛石が最高の價值を有すると言ふは、その一定量に對して交換せらるる他貨物の量が、これ程に多大なる物質が他にないからである。従つて、或對象の價值をいはんが爲めには、それを秤量すべき他の對象に關せしめねばならぬ。若し完全なる價值表を與え様とするならば、交換に與えらるる一切の他貨物の量を列舉せねばならぬ(十四頁)。

既述の如く、この價值を物に有せしむるには、效用、可讓性、及び供給制限の三者が必要なのである。

可讓性とは快樂を與え、苦痛を防ぐ一物の力の全部又は一部が、絶對的に、若しくは或期間、讓渡され得る事を云ふ。これが爲めには、その物は專有され得る事を要する。人は自分が切離し得ないものを與え得ないからである。

この屬性は、既述の如く、價值の要素であるが、凡そ快樂の源泉及び苦痛の防止物にして、絶對的に專有の不可能なものは殆んどない。彼はセイが「土地は生産力を有する唯一の物的要因ではないが、占有し得らるる唯一の、若しくは殆んど唯一のものなり」(J. B. Say Eco. poli. livre ii. ch. ix) と稱して、河海の水、風、日光等が生産力を有するも占有し得られずと爲せるに反對して、côte Route の葡萄園の價值や、Hyde Park を見晴らし得る家々の價值の大部分が、それ／＼太陽の暖さと空氣の新鮮より來るを云ひ、殊にはランカシャー地方の河川の瀑布が、盡く貸貸借及び購入の對象たるを擧げてゐる。

故に専有の絶對的不可能なるものは殆んどないが、不完全なるものは存する。シニョアは之を二種に分類する。

第一種は、個人の特殊の聯想に依つて愛好さるゝもの、又は個人の特殊なる欲望に適合せる一切の物的對象であつて、例へば祖先の住居たりしの故を以つて所有者の誇る邸宅、又は幼年時代の背景として愛さるゝ家屋の如き、若しくは所有者のみの習慣に適する間取を有する邸館の如きこれである。これ等が所有者にとつての價値は高いが、讓渡に際しての價値は、溫暖と雨露を凌ぐその實質を主とする。又家具衣服の如く、單に所有者が變つたといふだけの理由で、購買者以外の萬人に對する効用が低下するものがある。買つて來た乍りの帽子やテーブルは購買者の目には店頭にあつた時より些かも有用さを減じないが、一度之を轉賣せんとするならば、古物として扱はれねばならぬ。

効用を完全に讓渡し得ぬ第二のものには、吾々の一身についた屬性の大部分が包含される。智識熟練等の心身の力より生ずる利益の一部分は、その所有者に固着して切り離し得ないが、他の一部は讓渡し得るものである。例へば辯護士の如きこれである。彼自身が辯論をなす際に感ずる愉快は讓渡し得ないが、辯護そのものは恰も依頼者自身がその能方を有すると等しい結果を來さしめ得るものである(八一―十一頁)。

次に來る價値の要素は効用である。

効用とは、快樂を生み又は苦痛を防ぐ力である。茲にいふ快樂とは、凡ゆる種類の満足を含み、苦痛とは凡ゆる種類の不満足を意味する。元來効用なる言葉は、手段として苦痛を防ぎ又は間接に快樂を生む屬性を表はすのに用ゐられて來てゐるが、此處ではその意味を擴張して、直接に快樂を生む物も一切包含せしむる。かゝる意味に於ける効用は、價値の不可欠なる一要素であるが、物の内在的屬性に非ずして人類の苦痛及び快樂と物との關係である。特殊の對象からの苦痛及び快樂の感愛性は、無數の原因に依つて創造され、變化され、且つ絶えず變化するものであるから、種々な對象が種々なる人に對する相對的効用は、無限に多様なものであつて、これが一切の交換の動機となるのである (Political Economy 1850, p. 67)。

最後に來るものは供給の制限である。

嚴密に云ふならば、無限に供給されるといふものは存在しない譯であるが、經濟學上では、單に占有の勞さえ拂へば人の欲するまゝに所有し得るものは、その現狀に於ては供給無限なりと考へて宜しい。大海の水はこの意味に於て供給無限であるが、その一部が倫敦に齎されたる場合には、供給が制限され、單に占有の煩のみでなく、等價物を與えねば之を得る事が出來ぬ。多くの物は、その目的如何によりて、供給が無限ともなり、制限される事にもなる。例へば家事用としては河川の水は供給無限であるが、水車用としては總ての人を満足させるには不足な事が多い。従つてその使用權には代價が支拂はれる。處で如上の意味に於ける供給制限といふのは存在量を指すのであるが、經濟學上では、この他に現在の供給を制限する原因の考察をも包含せしめる。富には、ラファエルの繪畫の如く到底今日に於ては増加し得ざるものあると等しく、無限に増加し得べきものもある。

斯る物件の供給制限は、現在の供給と比例せずして、その増加を妨ぐる障礙の力に比例するものと考えらる。一例を擧ぐるならば、英蘭に於て上衣と裄衣の数は略々等しく、夫々の供給は人間の努力によりて限りなく増加され得るが、前者に要する努力は後者の約三倍である。故に上衣の供給を制限する障礙は、後者のその三倍だけ有力であるから、現在の供給量は等しくても、尙前者の供給が三倍だけ制限されてゐると考えるのである(七七八頁)。

如上三個の價値の條件中、供給制限が特別に重要である。これが價値に影響する事の主たる源泉となるものは、多様性の愛好及び卓越の愛好 (love of variety and love of distinction) なる人性の二大原理である(十一頁)。これあるが爲めに、單なる生存資料以上に様々なるものが要求される。かくてその供給が問題となるのである。

かくの如くにして價値は三個の條件を必要とするが然らばその大小を決定するものは何であるか。需要と供給これである。

アダム・スミスは例によつて必要な語の定義を述ぶる事なきも、有效需要と絶對的需要の兩者を區別し、價格に影響するは前者のみなるを説けるより推すれば、恐らくは購買力を伴へる購買意思を云へる如くである(註一)。ジエームス・ミルは明かに「購買せんとする意思及び購買の力を意味する」と述べてゐる。マルサスは貨物に對する需要は二個の異なる意義を有する。一はその大きさ (extent) 即ち購買せらるゝ量を云ひ、他はその程度即ち需要者がその欲望を満足せしめんが爲めに拂はむと欲し且つ拂ひ得る犠牲を云ふ」と述べ (Definitions in Pol. Eco. 1827. p. 244) 自身は後者を採用して「需要とは購買力を伴ふ購買意思なりと定義すべし」と説いてゐる (Prin. of Pol. Eco. 1820 p. 65)。

然るにシニョアは、かゝる意義を以つて、通常用法に矛盾するとなし、却つて貨物の一定量の效用なりとする(註二)。

供給なる語の意味に關しては、從來市場に齎されたる貨物量なりと解せられたるに對し、シニョアは必ずしも異議を唱ふるものではないが、かゝる意義に用ゐられたる場合、これを以つて價値の一原因なりと考ふる事を否とする。

之れは既記の上衣と裄衣の例を以つてして明瞭である。故にシニョアが、價値に影響するものとして供給の増減をいふ場合には、單なる數量上の増減でなく、供給を制限する障礙の増減によつて生ずる増減を意味するものと解さねばならぬ。約言すれば、需要とは貨物の量を制限する障礙の弱さ (weakness) である (十四一六頁)。

シニョア以前の需要供給論は單に兩者の比較にとゞまる。これ斯説が多く價格論に於て述べられたるが爲めに、他方に貨幣の存在を既定の事實とせるを以つて、斯論に於て二個の貨物を直接に對比せしむるの要がなかつたからである。シニョアは之を以つて價値を決定せしめんとする。従つて二物の交換が問題となる。従つて需要と供給は交換の對象双方に關せしめねばならぬ。茲に於て價値の内在原因と外在原因を認むるの必要が生ずる。

價値の内在原因とは、一貨物に效用を與へ且つその供給を制限するの諸原因である。外在原因と

は、この貨物と交換せらるゝ他貨物に效用を與へ且つその供給を制限するの諸原因である。二物の相互價值はこの二組の原因に依つて決定せらるゝものである。

この二組の原因に生ずる變化が、その貨物に及ぼす變動は夫々異なる。内在原因に生じたる變化は、交換に於てその貨物が他の一切の貨物に對する支配力(Powers of commanding every commodity in exchange)に影響する。即ちその一般價值(General value)に影響する。外在的原因の變動は、その變動の生じた貨物と當該貨物の相互的價值にのみ、即ちその特殊價值(Specific value)にのみ影響する。この双方の原因に作用する事情は永久に變動する。或時はたゞ一つの原因が。或時はその總てが。或時は同一の方向に。又或時は反對の方向に。而して反對の方向に動く場合は相互に相殺するの結果となる(十六―十七頁)。

如上の説明に於ては效用、(即ち需要)と供給とは、獨立のものとして對等の地位を有する觀があるけれども、更に考を進むるならば、效用そのものが供給に左右せらるゝ事著るしき事實が見出される。曰く「貨物の效用、即ち購買又は賃借の對象としての、貨物に對する需要は、主としてその供給を制限する障礙に左右される」と(十七頁)。例へば、巨大なる金剛石が最大なる願望の對象たるは、その供給を制限する障礙が著るしく大なるが故である。

效用が供給に依るとの原理は、供給を以てその供給の障礙と解せずして、現在量を解しても成立する。小麥の不作が大麥及び燕麥の需要を増加せしむることの命題は、次の如く解する事によつてのみ眞である。この場合小麥の不作は燕麥及び大麥の消費者に、此等を購買する力を増さしむる事にはならない。亦購買者しくは消費される小麥及び大麥の量が、増加した事にもならない。増加は後の生産に俟つのみである。故にこゝに云ふ需要の増加とは、これ等の貨物の所有を欲する度合、即ち效用の増加に他ならぬ(十五頁)。反對の命題に就いては反對の事が云ひ得る。故に貨物の效用はその供給に依る事大である。

同一の原理は、效用なる語を更に我等の満足又は快樂に直接關係せしめて解するも眞である。曰く「如何なる種類の貨物であつても、それが與へ得る快樂には限度があるのみならず、快樂は斯る限度に到達する遙か以前に於て、急速に増加する率を以つて減少する。同種の貨物二個が、一個の快樂を生ずる事は稀有である。十個が二個の五倍の快樂を與ふる事は尙一層稀である。故に一の貨物が豊富なるに隨つて、之を供給されて最早それ以上の供給を欲せず、欲しても極く僅少なる人々の數は増加するの傾がある。此等の人々に關する限り、増加供給はその效用の全部又は殆んど全部を喪失する。又その稀少に伴つて、之を欲する人の數及び欲する度合は増加するの傾がある。かくてその效用、換言すればその一定量の所有が與ふる快樂は増加する」と(十二頁)。チユールジョンは、こゝにシニョアが最終效用説の先驅たるの面影あるを認めてゐる(チユールジョン、輓近價值學說史、山下芳一氏譯二十七頁)。シニョアは所謂價格經濟學の立場に立つたが故に、注意は主として交換現象に、従つて交換價值に向けられた。使用價值は殆んど全く顧みられなかつた。かくて效用遞減の原理は原理としてこゝにまつた。

最後に、シニョアはリカアド・マカロック等の勞働價值論を批評する。

勞働なる語を普通の意義に用ゐて、之を以つて富の要素なりとする論者が、かゝる意見に導かるゝは、第一に、價值には單なる效用以外に何等かの屬性が必要なる事、第二に、有用にして勞働によりて獲得せられたるものは總て價值ある事、第三に、價值あるものは殆んど總てその獲得に何程かの勞働を要したる事 (has required) を觀察したる結果であるが、這般の事情が價值に必須なるものでない事は、それなくして價值の存し得る場合を想像し得るならば、以つて明瞭となる譯である。私が漫然海岸を散策しつゝある時眞珠を拾つたとしたならば、それは價值を有しないか。その價值は屈むで拾ふ占有の勤勞の成果なりとマカロック氏は答へらるゝであらふ。然らば蠣を食しつゝある際に、偶然當つたとしたらどうであるか。洵に效用の存する處へ、生産に必要な勞働を加ふれば、勞働の供給は制限されてゐるから、常に價值を生ずるが、「これは、その對象が供給に勞働を要するといふその必要に依つて、供給が制限されてゐるのである。供給を制限する他の如何なる原因を以つてするも、これが貨物の價值に及ぼす影響は、生産に對する勞働の必要と全く同一である」と。

リカードオに對しては、第一に、價值の主要部分を勞働に負はざる貨物は、リカードオのいふ如く僅少に非ずして多大なる事、第二に、供給の制限は、勞働自身の價值にも必要なるを以つて、勞働を採つて供給制限を捨つるは、常に部分的原因を以つて一般的原因に代ふるのみならず、その採用せる原因を有效ならしめるべき原因そのものをも除外するものなる事を以つて、答としてゐる(二十四頁)。

(註一) 貨物の市場價格は、實際に市場に關りたる、量と、貨物の自然價格を支拂ひ、心欲い、ある者の需要との割合に依つて支配せらる。かゝる人々を有效需要者といひ、彼等の需要を有效需要と稱すべし。それは絶對的需要と異なる云々 (Wealth of Nations, ed by Cannan, vol. I, p. 58) \*

(註二) 通常の言葉に於て、貨物に效用を與ふる諸原因の力は、需要なる語に依つて示される (Pol. Eco. 1850 p. 12), 又我々はそれ (需要なる名辭) を貨物の效用を表はすものとしてより以外の如何なる意味にも用ゐない様に努める (Ibid. p. 15)。

## (六)

以上を以て、甚だ不完全ながらシニョアが價值論の概要を終へたのであるが、實際に於ては、價格論に於て論述せられてゐる處にして以て價值論中に當然加ふべきものが多い。何となれば、シニョアにとつて價格とは貨幣を以て表はされたる一般の價值に過ぎないからである。故に價值論の意義を明瞭ならしむるの目的を以て、その目的に副ふ範圍内に於て些かその價格論に論及する。

今價值論を要約するならば

- (一) 交換され得るものは可讓性を有し、供給に制限があり且つ效用を有する一切のものにして亦かゝるものに限られる。而してかゝる屬性を有するものにして初て交換價值を有し得る。
- (二) 二物の相互價值は、價值の内在原因及び外在原因と稱せらるゝ二組の原因に據る。この二組の原因は、夫々交換せらるゝ二物の一方に效用を與え、且つその供給を制限する處のものである。故に價值は結局需要と供給の關係に依つて定まる。
- (三) 併し乍ら供給制限が特に重要にして、效用も亦之に據る事大である。

然らばかゝる重要な供給制限は何に依つて生ずるか。即ち供給を制限する障礙は何であるか。又如何様にして此等の障礙が、種々なる交換對象の相互的價值に影響するか。これ價格論の答ふる處である。

元來貨物の一般的價值なるもの、即ちその一定量と引き換えに獲得し得べき他の一切の交換對象の量なるものは、到底確定し難きものである。茲に於て、一貨物を撰定し、之を仲介として他の一切の貨物の價值を秤らうとする。この貨物は貨幣であつて、一度之が用ゐらるゝに到れば、一切の價值はその名に於て呼ばれる。これが價格である。故に價格とは貨幣に於ける一般的價值である(九十六―七頁)。

供給を制限する諸原因が價格に及ぼす影響の説明に入る前に、シニョアは一言「自明の如くに思はれるであらうが然も常に腦裡に置くべきもの」として、次の命題を挿入してゐる。

曰く「使用せらるゝ(生産に於て)自然的要素が何人も入手し得るもので、従つて實際上その供給が無制限なる場合には、生産物の效用は、生産者にしてその努力の適用を誤らざる限り、それを生産する爲めになされる犠牲に比例する。何となれば、何人もその労働と制欲を他物の生産に投ずる事に依つて、より大なる満足が得らるゝならば、その労働又は制欲の一定額を一物の生産に使用するを欲しないものである(九十七頁)。

さて供給を制限する諸原因に立戻る。

貨物の中には、今日最早存在せぬ要因の成果たるもの、若しくは離れた不定な時期に作用する要因の成果たるものがある。遺物の如き前者に屬し、特に大きい金剛石の如き後者に屬する。前者の供給は増加不可能であり、後者のそれは算定出来ない。かゝる貨物の價值は、何等一定の原理に従はぬ。全く社會の富と趣味に據る。茲にはかゝる貨物を除き、その供給が正確又は充分正確に近く算定し得る貨物のみを、論ずる事とする。

何人も支配し得べき自然の援助のみを受けて、労働と制欲が生産する貨物の供給に對する障礙は、全くその生産に要する労働と制欲をいつでも甘んじて忍ぼうとする人々を見出すの困難に存する。換言せば、供給はその生産費に依つて制限せられる(九十七頁)。

然らば生産費とは何ぞや。

その生産論に基いて、シニョアは此處に「制欲」なる觀念を容るゝ事の不可避を主張する。その論證として、リカアドオ、マルサス、ジエームスミル、トレンス等の諸説に批評を加へてゐる。

シニョアの解釋に従へば、リカアドオとミルとは、結局「生産費」に就ての意見に於ては一致するものであつて、共に利潤をその中に加へてゐる。茲にトレンスが批評の價值は存する。トレンスは利潤なるものは生産の結果生ずるものであつて、生産に先んじて存在するものでない。従つて之を生産費中に加ふるは不可なりと主張する。此の批評に對しては、シニョアは充分なる讚意を表してゐるが、單に利潤を除くのみでは不足である。之に代るべきものを與えられなければならぬ。トレンスの誤謬は省略の誤謬であると云つてゐる。省略すべからざるものは何であるか。制欲である。マルサスの意見も亦、制欲なる名辭の不足よりして言語の不正確に陥れるものと解釋された。マル

サスは、單なる勞働の他に何物か、生産に必要なを感じた如くである。彼は單なる勤勞が荒野を變じて價值ある森林となすものでない事を感じた。殖林者は若木の養育以外に、遠き成果の生産にその勞働を向けるといふ犠牲が添加せるをも、忍ばねばならぬ。マルサスはこの犠牲を以て生産費の一部と考へた。彼が生産費の一部として利潤を數へたる時、彼の意味するものは、實は利潤を以て支拂はるゝ行爲なのであつた。勞銀を數ふる人々の意味する處が、勞銀に非ずして勞働なるに等しい不正確である。此等の誤謬は、「制欲」の觀念を誘入する事に依つて救はれると説くのである(百頁)。

かくしてシニョアは、生産費を定義して「生産に必要な勞働及び制欲の高」なりといふ(百〇一頁)。

勞働の意義は説くの要はないが、制欲とは「自己が支配し得るものを不生産的に使用する事を差し扣え、若しくは、有意的に即時の成果の生産よりも、後の成果の生産を撰ぶ、人の行爲」をいふのである(五十八頁)。元來シニョアは「制欲」なる言葉を生産論に於て「資本」なる言葉の代りに用ゐたのであつて、その理由とする處は、資本なるものは單純なる生産要素に非ずして、大多數の場合、三生産要素の全部が結合して出來たものであるからといふのである。従つて實際に用ゐらるゝに當つては、他の經濟學者が資本なる言葉を使用すべき場合に用ゐてゐる事が多い。但し普通に「資本の量」を云ふ場合には、その資本の投下されてゐる期間を含めない場合があるが、「制欲の量」の場合には、收穫を待つ期間も當然入る事に注意するを要する。

生産に必要な勞働及び制欲の高なりと定義せられたる生産費は、生産者側の生産費と、消費者側の生産費に分れる。前者は一定の貨物又は勤務を販賣するものが、引き續きこれを生産し得んが爲めに蒙るべき勞働の制欲の高であり、後者は一定の貨物又は勤務の提供を受くる者が、若し之を購買する代りに自ら生産するにせよ蒙るべき勞働と制欲の高である。前者は價格の最高限、後者は最低減をなす。自由競争の下にあつては前者と後者は一致し、價格は生産費を表はす。

如上の原理は完全なる自由競争を假定しての事であるから、實際上はかゝる完全なる自由競争の存せざる爲めに、種々なる妨害を受くべききは明らかであるが、經濟學は特殊の事實に關はらずして、一般的傾向を論ずるものである。されば、生産費に對して自由競争の際に於ける價格の規制力を與ふるは之を以て價格が到達する點なりとするに非ずして價格が常に接近せんとして、ある動搖の中心なりといふ意味である。

以上、その價值に就いて論述せる貨物は、その生産費の定義にみても明瞭なる如く、その生産には勞働と制欲、通俗の言葉を用うれば勞銀と利潤のみが支配する、處のものであるが、實際に於てはかゝる貨物は著るしく僅少であつて、大多數の場合に何等か擅有せられたる自然的要因の助力を受くるのが常である。その生産行程の如何なる點に於ても、土壤や位置の特殊な利益、心身の特殊な能力或は人に知られてゐないか又は法律に依つて模倣を禁せられたる生産方法の助力を受けない貨物は、如何に僅少であるか。即ち地代を以てその報酬とするものの援助を受けないものが幾何あるか。シニョアは、かゝる援助を受くる生産物を獨占の目的と稱し、かゝる自然的要因を擅有するものを獨占

者と名付くる。かゝる獨占の貨物の價值が、單に制欲と勞働の所産よりも、大なるべきは論を俟たぬ。故に一貨物を以て、自由競争の下に生産せられ従つて勞働と制欲の成果であつて、何等擅有せられたる要因の助力なきものとして之を考ふる場合、決してかゝる貨物の存在するといふのではなく、若し存在するならば、その價格を支配する原理はこれであるといふ意味なのであるといふ(百〇一—十四頁)。

以上述べ來つた價值論の示す處は貨物の大多數たる任意可増財の價值は、自由競争の下に在つては勞働と制欲より成る生産費に歸着する事又、シニョアの謂ふ獨占の加はるものにあつては、廣義の地代も加はる事これである。然も貨物の大多數はかゝる獨占の下にあるを以て、結局、通俗の言葉を以ていへば、大多數の貨物の價值は地代、勞働及び利潤より成る生産費に依つて決定せらるゝと説くに近い。而して價值論よりみれば、生産費は供給の障礙なりと考へられてゐる。

シニョアは、勞働を以て其他の供給障礙と同列に置く事に依つてリカアドオよりも寧ろマルサスに近づき、需要が供給に依頼するの著るしき事を力説する事に依つて、價值論中に於ける供給の意義を、マルサスよりも一段重からしむる。而して生産費中に地代勞銀利潤の三者を認むる事に於て、スマス、マルサスの流を汲む。

既記の如く、チユールジョンはシニョアに限界效用説の先驅者たるの面影を見出すと共に、その明確な潤の少い推論法に依つて、後年の數學派の傾向を示してゐるといふ。併しそれ等は私は研究の未到達の範圍である。この一文の目的は、シニョア自身の價值論が如何なるものであるか、大過なく紹介し得らるれば足る。

## 新刊紹介

Professor Seligman—Essays in Economics.

The Macmillan Co., New York, Dec., 1925.

町田義一郎

Columbia University の經濟學教授として、また經濟原論、經濟的史觀論、及び租税に關する幾多の著書の筆者として夙に令名ある Edwin. R. A. Seligman 教授は先頃新たに Essays in Economics 及び Studies in Public France の二書を公にされた。共に教授が之れまでに發表された多くの論文並に講演筆記のうち未だ他の自著中に輯められて居らぬもので然かも單なる一時的興味以上に出る——前著序文中の教授の言に據れば all too complaisant critics の斯かく見做す——ものから選んで二卷を爲し主として經濟學に關する論説を前著に又財政學に關するものを後著中に輯録し姉妹篇として出版されたのである。

茲に紹介せんとする Essays in Economics. の方は一八八六年から一九二五年に至る間に起稿された(一)學術雜誌への論文(二)講義及び演説(三)共同編纂の書冊へ寄稿の論説(四)政府委員會の報告等十四章を輯め、之を研究題目に依つて分ければ(一)經濟學史の研究四章(二)經濟理論に關連するもの四章(三)經濟政策に關する三章並に(四)通俗講演一章と教育問題二章から成る。(序文参照)今その内容に就いて一瞥するに第一章第二章は書中最も古い一八八六年の論稿である。第一章 Continuity of Economic Thought. は經濟學の著述に對する Comte の批難を皮相の謬見なりとして